

# JAAF 陸上競技研究紀要

公益財団法人日本陸上競技連盟  
ISSN1349-7596

**Bulletin of Studies  
in Athletics of JAAF  
Vol.7, 2011**



FOR ALL SPORTS OF JAPAN

# 「陸上競技研究紀要」

(Bulletin of Studies in Athletics of JAAF)

## 投稿規定

陸上競技研究紀要編集委員会

### 1. 投稿資格について

本紀要に投稿できるのは、原則として日本陸上競技連盟登記登録者（例：公認コーチなど）とするが、それ以外でも編集委員会が認めた場合には投稿することができる。

### 2. 投稿内容および種類について

投稿内容は陸上競技についての理論と実践に関するもので、内容に応じて、総説、原著、資料、指導法および指導記録の報告などに分類される。スタイルは和文、英文のどちらでもよい。

投稿論文には上記の投稿種別を明記し、英文のタイトル、著者、所属、総説および原著には要約（150語以内）をつける。

（注：何らかの理由で英文要約等の作成が困難な場合は、編集委員会にその旨をご相談ください）

### 3. 採否等について

原稿は査読を行い、査読結果をもとに採否および掲載順序の決定、校正などは編集委員会が行う。

### 4. 原稿の書き方について

原稿は原則として、ワードプロセッサで作成する。本文は、横42文字×縦38字で1頁とする。（1頁は約1600字、刷り上がり10頁以内、図表もその頁数に含む、すべて白黒にて作成）

英文は、A4サイズタイプ用紙を使用し、15枚以内を原則とする。

計量単位は、原則として国際単位系（m, kg, sec など）とする。

また、英文字および数字は半角とする。

### 5. 文献の書き方について

本文中の文献は、著者（発行年）という形式で表記する。

例）田中（1996）は —————

文献は、原則として、本文最後に著者名のABC順で記載する。書誌データの記載方法は、著者名（発行年）、論文名、誌名、巻（号）、ページの順とする。

例）吉原 礼，武田 理，小山宏之，阿江通良（2006）女子棒高跳選手の跳躍動作のバイオメカニクスの分析。陸上競技研究紀要，2：58-64。

伊藤 宏（1992）陸上競技の発育・発達。陸上競技指導教本—基礎理論編—。日本陸上競技連盟編，大修館書店，55-72。

同一著者，同発行年の文献を複数引用した場合は発行年の後に a, b, c をつける。

例）田中ら（1996 b）は，—————

### 6. 原稿の提出先

投稿原稿（本文，図表など）は，下記へ E-mail の添付資料として送付するとともに，プリントしたもの1部を郵送する。

〒150-8050

東京都渋谷区神南 1-1-1 岸記念体育会館 3階

日本陸上競技連盟

「陸上競技研究紀要」編集委員会宛

(Tel 03-3481-2300 Fax 03-3481-2449)

E-mail:kiyou@jaaf.or.jp

### 7. 原稿の締め切り

原稿の締め切りは，1月末日とする。

### 8. その他

本研究紀要に掲載された内容の著作権は公益財団法人日本陸上競技連盟に帰属する。

## あ い さ つ

公益財団法人日本陸上競技連盟  
専務理事 尾縣 貢

この夏の世界選手権大会（テグ）を観戦し、世界の勢力分布に興味を持った。その興味の一つ目は、一極集中化の傾向がますます強まっていることである。ジャマイカなどカリブ海諸国の短距離系、ケニア・エチオピアなどアフリカの長距離・マラソン、東・北ヨーロッパの投てきなどが更に強化されてきた。二つ目の興味は、一度は競技力が低下していたドイツ、フランス、イギリスなどの古豪が復活をしてきたことである。この一極集中化および古豪の復活は、偶然のことであろうか？ 私は、決してそうは思わない。自分たちの先天的な能力を見極め、それらを開花させるための育成・強化の計画と具体的方策を考え、地道に実践してきた成果に違いない。

日本もこれらの国に学びながら、日本独自の選手の育成・強化を実践して、日本らしさを前面に出していく必要が今まで以上に求められている。その日本らしさの一つが、医科学との強固なタイアップである。日本人に向けた種目の選定、日本人に合った合理的な技術、効率的な体力トレーニング、レース分析など勝つための戦術の開発などの科学的な立場からの検討に、これまで以上に力を注がないとならない。また、体育科教育的な視点から見た子どものカリキュラムの開発、医学的な観点から見た事故や障害予防策、競技力を高めるための栄養サポートなどに関する研究も急を要する。

本紀要が陸上競技に関する研究の中心となることを願う。そして、掲載された研究に示された知見が現場に活かされ、わが国の陸上競技がますます発展することを願う。

# 陸上競技研究紀要

Bulletin of Studies in Athletics of JAAF

Vol.7 2011

## 目 次

### 【資料】

2000 - 2010 年世界大会男女 20 kmW におけるレースペース分析  
・・・・・・・・法元康二・・・1

競技会アナウンスに関する観客の満足度調査  
—スーパー陸上競技大会 2010 川崎を中心に—  
・・・・・・・・阿保雅行ほか・・・9

【日本陸連科学委員会研究報告 第 10 巻 (2011) 陸上競技の医科学サポート研究 REPORT2010】  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17